



No. 612

平成31.
3月号



思いが変われば (1)

小関照雄

昨年から今年にかけ、たびたびお話し申し上げていることについて、忘備録というわけではありませんが、今月から順を追ってまとめておきたいと思えます。



まず、そもそもきっかけとなったのは、お結界で聞かせてもらったお届けの言葉でした。「医者に行くので、治療の効果のあるように、薬もよく効きますように」。別段おかしな内容ではありません。むしろ、もつともらしいお届けです。こういった向きのお届けをなさる方は、他にもよくあります。しかしどういふ訳かこの時の私には、どこか引かかるような感じがありました。ただ感じはあるのですが、何がどう引かかるかまでは、私にはよく分かりませんでした。

そうこうしているうちに、玉水親教会の教会誌『あゆみ』に掲載された一文から、その折に引っかけたものが、自分の中で何となく分かったように思えました。『あゆみ』には「信話集 取次百景」というタイトルの頁があります。ある号に『湯川安太郎信話』第十四集に収録された病氣と医者の話が紹介されていました。どんなふう書いてあったのか、そのまま引用してみます。文中に「師」とあるのは、玉水初代教会長（初代大先生）のことです。

「…十四集には『だいたい、お医者さんが病気を治すのではない』という、師の教話も載っています。医師は病気の診断をするが、診断だけでそれが治るものではない。といって、薬にしても完全に病気を治すものではなく、たとえて言えば『十の病氣に四も効けば、薬としてはよほど力のある薬と言うてよろしからう』。おまけに、一人の病人を複数の医者が診て、その診断が違うこともあるのだからと、すべてが不完全であることを言っておら

れるのです。

『というて、何も薬を非難したり、お医者はんを攻撃しているのではない：人は皆、行き詰っているということをお分かってもらいたいために：その一例として、医者というもののくすりというものが、どんなものであるかということをお話しているだけのことである。必ず医者の言うことには間違いはないと、言えないのですからなあ。』



—このような記述を読んで、私は、初代が本当に「お医者さんが病気を治すのではない」と言っておられたのかと思ひ、思わず十四集を確かめてみました。確かに書いてありました。どうして私がこの箇所こだわったのかと言うと、それは医者や薬と信心との関係について、もう一つ食い足りないと感じていたからです。とりわけ「祈れ薬れにすればおかげも早いが、薬れ祈れにするからおかげにならん」という教えは、単なるお願いの順序だけの問題なのか。それで片づけてしまつては、教えの頂き方として、どうも底が浅いように思えていたからです。

そこで、引用した十四集の初代の言葉をよく読み直すと、どうも初代は、医者や薬で病気は治らないように思っている節ふしが感じられました。初代は、一般論として薬の效能の話（十の病気に四も効けば：云々の話うんぬん）をしている訳ではなく、あくまで信心の話をしている訳です。つまり、神様にお願ひしておかげを受ける話をしている訳です。ということは、初代の場合病気のことを神様に願う時、医者や薬で病気は治らないという心の土台のもとで、神様に願ひを向けているのではないか、と思えたのです。ここが重要なところで、医者や薬で病気は治ると思つて願ひするか、医者や薬では治らないと思つて神様にお願ひするかでは、実は全く違ふのです。

医者や薬で病気は治るといふことなら、病院に入った人は、皆元氣になつて帰つて来るはずですが、実際はそうではありません。これはある意味事実ですから、初代は「すべてが不完全である」と言つた訳ですが、これは医学の力（つまり人間の力）が足りないことを説明している言葉です。要するにお互い人間は、病気という領域についても、やっぱり行き詰つている。このことを初代はおつしやりたかつたのだと思ひます。

さて、ここから更に重要です。「初代の場合、病気のことを願う時、医者や薬で病気は治らないと思つて願ひしている」と申しましたが、医者や薬で病気は治ると思つて願ひするか、医者や薬では治らないと思つて願ひするか、その二つはどがどう違ふのか、といふことです。まずは

冒頭の、私がどこか引つかかったお届けの中身に、今一度戻っていただきたいと思います。

「医者に行くので、治療の効果のあるように、薬もよく効きますように」。多少理屈っぽくなりますが、ここには、治療や薬が奇跡的な効果をもたらすならば、きっと病気はよくなるはずだという思いが、意識する・しないに関わらず漂ただよっているのです。言い換えれば、「医薬の効果がありますように」という願いは、医薬の効能発揮と病気の治りが結びついた願いですから、神様にお願ひする時点で、神様よりも医薬の方が信じた願ひになっってしまったている訳です。つまり、神様より医薬の方が序列が上になっってしまったている。信心は神様を序列の一番上にもってこなくてはいけないのに、その序列が逆転してしまっているのです。だから、それで病気が治っても、それは神様のおかげで治ったのではない。医薬のおかげで治った、ということになるのです。

信心は、神様に願って神様のおかげで治してもらおうということですから、これでは「神様に直してもらおう」という信心の回路がちゃんと繋がつながっていないとは、どうも言えないのです。神様のおかげとは何か。人の力では足りず、行き詰っているのだから、その足らぬところを足してもらおうのが、即ち神様のおかげを受けるということです。「治療や薬の効果のあるように」という願ひは、医学の働きという一部だけを足してもらおうとすることです。本当に神様のおかげを受けるとは、一部を足してもらおうのではなく、すべてを足してもらおう願ひ方になっていくことが本来なのです。

初代が病気のことを神様に願う時、医者や薬で病気は治らないという地平からお願ひしていることの意味は、一部分ではなくすべてを神様に足してもらって病気を治してもらおうという初代の心の現れだということことです。初代は信心の要点として「心のひねり方」ということをおっしゃっています。「ちよつとした心のひねり方ひとつで、一心の信心となり、おかげになる。神様は、こちらのその心のひねり方を見ておられる」と。

最後に補足を一つ。医者や薬では治らないという地平からお願ひすると言っても、「何も薬を非難したり、お医者はんを攻撃しているのではない」と初代が言わている通りで、医薬も天地の恵みだから、その恩恵あずに与ればいいのです。ただ難しいのは、医薬の方について頭を取られやすく、信心を見失ってしまいやすいことです。医者にかかれるのは、恵まれているから（特に経済に）で、そのように恵まれていることへ感謝とお礼を申して、かからせてもらえればいいのです。



No. 613

平成31.
4月号

思いが変われば (2)

小関照雄



神様のおかげとは、人の力の足りないところを神様に足してもらおうことで、それがおかげの意味です。ですから、「信心しておかげを受ける」とはどういうことかと考えてみますと、神様に一部を足してもらおうのではなく、全てを足してもらおうようにしないといけない。それが本来ではないかと思に至ります。そのようなことを先月号で申し上げました。

以前、こんなことがありました。大人三人と幼稚園児二人の、収入不安定な生活で、「もう千円しかありません」というお届けです。ふとご神前を見ると、お米が一袋お供えしてありました。「このお米、お下げさせてもらおうか」という気持ちだが、私にふと起こりました。しかし、結局お下げしませんでした。焼け石に水、だからです。しばらくは助かったとしても、また同じことになる。神様に助けてもらわないと、どうにもならない。お米に助けてもらうことは筋違すぢちがいだからです。こんな時は、宝くじでも当たらないかと思っているだろうなど、そんなことを私は思いましたが、案あんの定じようでした。こんな時に助けてくれるのが神様ではないか、宝くじを当てさせてくれないか、となるのですが、これでは宝くじの当選という一部のことだけを神様に足してもらおう、という願いになっています。神様にすべてを足してもらおうという願いの心になっていないのです。

◇
こういう時に神様のおかげを頂けたために、どのような「心のひねり方」をして神様に向かえば良いのか、それがテーマです。

さて、先月号でも申しましたように、玉水初代教会長（初代大先生）の場合、病氣のことを願う時、医者や薬で病氣は治らないと思ってお願いしている節ふしがあります。初代は二十歳で和歌山から大阪へ出て、奉公勤めを始めたその年の暮れに大病をしています。そこで、その時のことを振り返

って、初代が神様に向き合おうとした時の「心のひねり方」を伺ってみます。

そもそも初代が信心するようになったのは、今申した二十才の年の大病がきっかけでした。それまでの初代は、言ってみれば筋金入りの信心嫌いでした。初代は理屈の強い性格の人でしたので、神様と言っても、それは実際にあるものやら、ないもんやら分からない。あるとも言えるし、ないとも言える。そんなどっちつかずで決着がつかないようなものは、まったく頼りない。そんな神様に手を合わせて信心する、というような気は起こらないという考え方でした。

そんな初代でしたから、信心している人を見ると、心の中で「バカな奴じゃ」とさげすむくらいの、強烈な毛嫌いの仕方をしていました。何せ根が理屈屋ですから、信心ほど理屈に合わんものはないと思われて、「信心する人があほ顔に見える」とまで言っていたほどです。で、その初代が百八十度転換して、とうとう神さまに手を合わす気になったんですから、これはよくよくのことです。その転換を促したのが、二十才の年の大病です。

生きるか死ぬかという大病を患った初代は、世間の人同様に、病気のことなら専門家のお医者さんのお世話にならねばならぬと、医者に診てもらいました。医者は「加減する、加減する」と言ってくれますので、医者の方言うままに、そのうちには良くなることだろうと安心して、初代はお医者さんを頼りにしていました。「加減する」というのは、「モノの具合や程度をほどよく調整する」という意味です。

が、しばらくすると、案に相違して「これはもうあかん」と医者から宣告されます。がっかりさせられた初代は、「なんのこっちゃ、生きる加減してくれると思うてたら、死ぬる加減してくれてたんか」と、無性に腹が立ったそうです。医者から「もう、あかん」と見放されては、死刑の宣告を下されたのと同様です。万事窮す。もうどうにも手の下しようがない。さすがに初代も、「ただじいっと死ぬのを待つよりほかない」と覚悟を決めました。

しかし初代には、どうしても死ねない理由がありました。それは「自分にはまだ親がある。その親を置いて先に死ねない」という思いでした。初代の信心嫌いの強さについて先に触れたように、その様子からも初代の性格が分かると思いますが、初代は思いの強い人でした。「親を置いて先に死ねない」という思いにも人並み以上のものがあり、その思い一つが、窮地

に立った初代を神様に向かわせたのです。

そこで、どの神様に願おうかと思案していた初代の頭にフト浮かんでは、それまでに聞いたことのあった「天地金乃神^{てんちかねのかみ}」という神様の名前でした。天地があることだけは確かで、自分もその天地に生きているのだから、神さまとしての筋が立っている。お頼みするならこの神様よりほかにはないと、寢床の中から「私は今死ねません。どうぞ：」とお願ひしただけでした。すると翌日から芋を蒸すように熱が出、湯気の立つような汗が止めどなく出始め、へその辺りからは膿のようなものも出て、さしもの大病が六日で全快する、起死回生のおかげを頂く結果となったのです。



さて問題は、この時の初代の神様への向かい方が、どのような向かい方だったか、ということ です。医者 hands を放しましたが、そうなる と 回りの人たちは、「さあ、薬を」と一層うるさく勧めてくれました。初代は、その回りの親切をきつぱりと拒絶しました。「いくら勧めてくれても、もう医者のくれる薬など、飲む気がしない。これ飲んだら治るから、という証明付きの薬なら飲みますが、もう、あかんと言う医者 の薬が飲めますかいな」という態度を貫いた訳です。普通なら、今までと違う薬でも勧められたら、「これまでののはダメだったが、これ飲んだらひよっとして効くかも知れん：」ということになってもおかしくないと思うのですが、初代はそれらの方には一切心を動かさなかった、ということ です。

初代の中で、何が起こったのでしょうか。神様に向かう段になって、初代は序列の先頭を、医者から神様に入れ替えたのです。今までは医者 を先頭に置いていたところに神様を持って来て、序列を逆転させた。

神様にすべてを足して頂くという方向へ思いを変えて、動かさなかった。神様に頼むにあたって、そのように「心をひねった」。

こうしたことではなかったかと、私は思うのです。「初代の場合、病氣のことを願う時、医者や薬で病氣は治らないと思ってお願ひしている節がある」と、先月号の内容を最初に振り返りましたが、それは初代のこの時の経験、即ち薬を断って、すべてを神様に足してもらった経験をすることが、土台になっているように思えるのです。



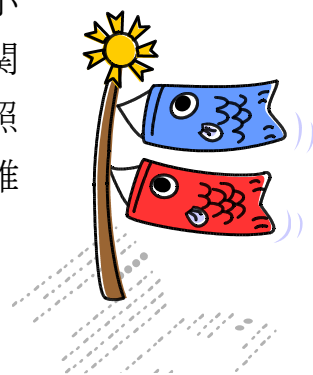


No. 613

令和元
5月号

思いが変われば (3)

小関照雄



神様のおかげを頂くためには、どのような「心のひねり方」をして神様に向かえばよいのか、それがテーマだと先月号で申し上げました。ただ「心のひねり方」という言い方では、漠然とした印象が強く、はっきりしないと言えはつきりしません。けれども、玉水初代教会長（初代大先生）が「神様はその心のひねり方を見ておられる」と言われていることを、重視しないわけにはいけません。どうしてか。簡単に申せば、おかげの頂ける心のひねり方ができればおかげになるが、そうでなければ当然おかげにならない、という図式（方程式）がそこに存在するからです。初代によれば神様は、そういう氏子の心の変化、心の状態をじっと見ておられる、というのですから、そこを無視せず何とかすれば、おかげの道が開けるのです。おかげがほしければ、そこに希望を見出すよりほかないのです。

その「心のひねり方」とは何か、それを理解するために「序列を変える（神様を序列の一番上にもってくる）」とか「神様に（一部を足してもらおうのではなく）すべてを足してもらおう」という観点を取っかかりとして、お話ししてきました。今月は、「思いを変える」という観点から「心のひねり方」について考えてみます。「心をひねる」と「思いを変える」。この二つの言葉だけでは、何のことかよく分からないと思いますので、順を追って話を進めてみます。

信心においては、「思いが変わればおかげになる」という言い方をするところがあります。もつと厳密に言うならば、「思いが変わっただけでおかげになる」と言い方になります。おかげを受ける前と後で、何が違うのか、何が変わったのか。そこに注目すれば、おかげになる（おかげが現れる）要因が分かるはずだ、という発想です。おかげになるか・ならぬかの分れ目をじっと凝視してみると、やっていることには特に変わりがない。つまり、行いには変わりがなく同じだが、おかげの前と後で、思いが変わったとい

うことがある。要するに、行いに変化はなくとも、思いだけが変わったことでおかげになる。そういうことがあるということ、「思いが変わっただけのおかげになる」とは、そのような意味合いです。

私は去年、たまたま玉水親教会の教会誌『あゆみ』を読んでいて、その「思いが変わっただけのおかげになる」ということが、実は『心のひねり方』に通じるのではないかと気づかされたところがありました。記事の要点を辿ってみます。

玉水初代・湯川安太郎大先生は、もともとは商売人でした。二十才で和歌山から大阪へ出て、当初は奉公勤めに尽力し、後には小売り商売に転じます。寝る間も惜しんで準備にも抜かりのなく、商売に精を出しました。また、先月号で述べたように、二十才の暮れの大病で起死回生のおかげを頂いたことをきっかけに、信心の道にも縁を得ました。誠実な商売ぶりと同様に、信心にも人一倍の熱心さをもって、参拝と教会の御用に励んでいました。

ところが、商売の手を広げて貸売り（掛売り）を始めたことが災いして、売掛金の掛け（回収）がコゲつくようになり、次第に資金繰りに困るようになりました。そこで、頼母子たのもしに手を出したことで、更に傷口を広げる結果になりました。「頼母子」とは、中世の古い時代からある庶民の融資組織です。例えば、十人の仲間が、毎月一万円ずつ持ち寄って融通し合おうと決めた、とします。初めの月は、仲間が持ち寄った合計額の十万円を、誰それ（仲間の中で、いの一番にお金が必要な人）に融通する。そして、その翌月は誰、そのまた翌月は誰、といったように順番にお金を融通してもらえる、という仕組みです。そういうシステムですから、最初に十万円を受け取ると、残りの九か月は、毎月一万円ずつ支払っていく義務が発生します。更に、色々な決め事もあって、利子が発生するような場合もあったようです。

商売人時代の初代は、苦し紛れにいくつもの頼母子に加入し、当座の資金難は切り抜けられるにしても、あとには頼母子へ支払う掛け金が、雪だるま式に膨れ上がっていくという地獄を見ることになります。結局、頼母子に加入したことは、商売の運転を助けてくれることにはならず、むしろ逆の結果をもたらすようなことになってしまいました。初代は、この苦境が小二年ほど続く中、ようやく一つのこと気づかされます。それは「自分は毎日、いかにも神様を拜んでいたようだが、実は頼母子を大明神様扱いして、頼母子を拜んでおったんじゃないか」ということです。確かに、

最初に頼母子に手を出した時の気分は、まさにそうだったと、初代はこれまでの心得違いをお詫びして、神様に掛け金を払っていただくようお願いしたら、三か月目からは、頼母子屋が集金に来る時には、お金がちゃんと手元にあるようになったのです。

信心の上から見ると、これは一つの前進でした。しかし、肝心の商売の方は以後も全く好転せず、欠損に欠損が続き、とうとうお手上げの土壇場まで追い詰められてしまいました。この最大の苦境の中で、初代は神様の前にじつと座り、「どうして…」と思いを凝らす中、また一つのことへ気づかされます。それは「自分はこれまで、商売は自分の商売であり、神様を拝んでいるつもりが、実際はこの自分の腕（商売の才覚）を拝んでいた」ということです。初代はこの気づきをきっかけに、「商売は実は神様の商売であり、その点、自分は間違っていた。神様が商売されるのだから、自分は奉公人として神様というご主人（親方）に使っていただこう。それが本当だ」という思いに切り替えたのです。

以後初代は、自分で決めた奉公人としての八つの役前を果たすことに専念するうち、あれほどどうにもならなかった商売の車が唸りを上げて回るようになったのです。多くの借金が片付くどころではない、前と後とで目を見張るような違い（おかげ）が現れたのです。そして、ここで大事なことは「おかげを受ける前と後で、一体何が違うのか、何が変わったのか」ということです。

実は、初代のしていること（行い）自体に、変わりはないのです。相変わらず信心と商売に、人一倍熱心に打ち込んでいる。そういう姿があるだけです。変わったと言えば、思いが変わった。それだけです。「自分の商売」から「奉公人としてご主人である神様に使っていただく」という思いへ切り替えた、それだけです。初代の願いのそもその眼目は、商売の車がうまく回っていくことです。と言って、「有力な資金源が見つかりますように」とか「格安な仕入れ先が見つかりますように」とか、「大口の得意先ができますように」とか、そんな願いを神様に向けたわけでは一切ありません。ただ、思いが変わっただけです。「〇〇が見つかりますように」といった願いは、資金源とか仕入れ先とか得意先といった、一部のおかげを願う心です。対して初代の「奉公人の心」は、すべてを神様に足していただけこうというおかげを願う心なのです。

この初代の実話にある「心の切り替え方」、これこそが、神様がじつと見ておられるという氏子の「心のひねり方」ではないかと、私は思うのです。

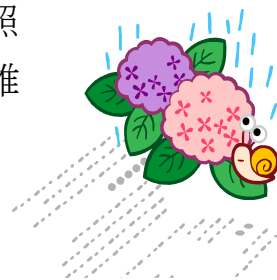


No. 614

令和元
6月号

思いが変われば (4)

小関照雄



神様のおかげが頂けるような「心のひねり方」をすること、それが信心の急所だということをテーマに、色々な観点から話を進めています。「神様は、信心する者の心のひねり方を見ておられる」という玉水初代教会長（初代大先生）の言葉の意味が大事です。私たちの信心がおかげのツボにスパッとハマるには、神様のおめがねにかなう心のひねり方が出来ればよい、ということなのです。

前号で、初代の信心がおかげの現れる信心へ転換した実例から、初代がどういう心のひねり方をしたのかを、追いかけてみました。初代のように商売の苦境から脱出するおかげを頂きたいという時、普通ならどうい願う方になるでしょうか。商売人さんなら、例えば顧客の拡大とか、資金の融通先の確保だとか、取引先からの資金回収だとか、世間の景気が上昇するとか、こうなれば助かる、このことがうまくいけば苦境から脱出できるのでは、という算段を描いて、「〇〇のことが都合よくいきますように」とか「△△のように事が進みますように」といった向きで、神様に向かうことになると思われます。

しかし前号で申したように、初代はそういう願う方を一切していません。そもそも商売なら、それがうまくいく方法をあれこれ算段して「どうぞこれがこうなりますように」と、そのことを願う。また、そういう算段通りに事が運ぶことが「おかげ」だと考える。人というのは、そういうふうに願おうとするもので、それがむしろ普通だと思われれるのですが、初代の場合、そうなっていない。それはどうしてなのか？ 初代の「心のひねり方」を理解するには、ここが大事なポイントかも知れません。

また、同じように前号では、初代自身が「自分は神様を拝んでいるつもりでいたが、実は自分の腕（商売の腕、才覚）を拝んでいたことに気づかされた」ということを申し述べましたが、それは結局、自分の商売の腕が

自分自身を現在の商売の苦境に追い込んだという自覚（反省）に基づくものでした。それならば、自分の腕にはまだまだ力が不足しているということですので、自分の腕に間違いのない力がつきますように、判断ミスはありませんように、利益の叩き出せるような腕が振るえますように、と願うのが一つの願い方です。むしろそれが普通の神様への向かい方だと思われます。しかし初代は、そういう願い方も一切していません。

それはなぜか。これは信心における「我^が」の問題だと私は思います。このお道の信心では、我^がということの問題にするところがありますが、自分が頭に描いた商売の算段というのは、「神様のはからい」ではなく「自分の力」というものを願いの中に持ち込むことになります。初代の商売の苦境は、もう自分の力ではどうにもならない状況にあるわけで、だからこそ神様に願っているわけです。それなのにその願いの中に、またまた我^が（自分の力）を入れ込んで逆流させるようなことをしては、神様に真^{まこと}は通じないという、そういう問題がここにあったのではないかと思えます。

別の言い方をしますと、自分が頭に描く算段通りに事が運ぶように願うのは、それが顧客の拡大であれ資金の融通あれ、自分の商売の能力（腕）を向上させることであれ、それらは皆、顧客や資金や能力といった一部だけを神様に足していただくという願い方になっていくのです。「これさえ何とかなれば」という願い方だと言えればいいでしょうか。初代の場合、もう自分の力では商売の苦境はどうにもならない。神様に一部を足してもらうような願いの向け方では、埒^{うち}が明かない。だからそういう願い方を全部放棄して、すべてを神様に足していただく向きへ心をひねった——前号で申し述べた初代の事例の経緯は、このようなことではなかったかと思われるます。

神様に一部だけを足してもらうことと、すべてを足してもらうこととの違いを、分かりやすく説明するのは中々難しいのですが、例えば商売の苦境を脱するには、大口の顧客がドンドン増えれば問題はないと考えて、その実現をお願いしたとします。それは当たり前のことのように思われますが、しかしそれは、あくまで自分の算段の実現であって、突き詰めればそういう自分の算段を信じていることになります。

つまり神様に願っていると言いながら、神様にどこか任せきっていない。神様よりも自分を信じる部分が残っているのです。神様より自分を信じる部分があるということは、神様への願いの中に我^がが出てしまっていると言

えます。結局これは、神様に願いを向ける時の心の問題、思いの問題のことを申しているわけです。神様への願いの中に、神様を信じる心と自分を信じる心とが、両方混じっていれば、自然神様を信じる心が小さくなるので、それでは神様にすべてを足していただくことはできないのです。つまり、「大口顧客の増大」という一部だけを神様に足していただこうとするような願いの心になつてしまつているのです。

一方、神様にすべてを足してもらうということは、どういうことか。それを裏返して言えば、要するに自分を信用しないこと、自分には何の力もないと自覚することだと言えます。自分を信用しない願いの心になれば、神様にすべてを足してもらうことが出来る。願いの中に我が（自分というもの）が残っていれば、神様に一部だけを足してもらうような願いの心になつてしまう。——相当理屈っぽい話ですが、概おおよそねそのように説明できるでしょうか。

もう一つ付け加えますと、これまでに取り上げた実例で申したように、「初代の心のひねり方」を大きく全体的に見れば、神様と他のものとの序列を入れ替える、神様を一番先頭にもつてくる、ということがありました。序列の転換をはかったわけです。この点も加えて、改めて「神様のおかげが頂けるような心のひねり方」を理解するための観点を三つあげますと

①神様を序列の先頭にもつてくるという「序列の転換」

②神様に向ける願いの中に我が（自分というもの）が出てしまつているか、いないかという「我の問題」

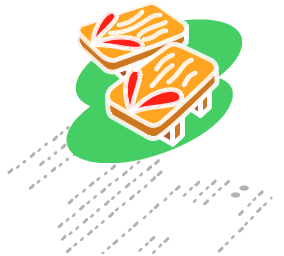
③神様にすべてを足してもらうか、一部だけを足してもらうに留まるかという「すべてか一部かという問題」

——この三点を参考に「神様のおめがねにかなう心のひねり方」を考えてみて下さい。すでに申したように今月は理屈の強い話になり、分かりづらいかと思いますが、自分というもの（自分の力）を信じなければ、それで神様を丸ごと信じることになるのです。また、「神様に足してもらう」ということを、度々申しましたが、それは自分の力では足りないから、神様に足してもらうという理屈です。つまり、神様に足してもらうには、そこに「足りない自覚」というものが必要なのです。例えば、病気で医薬の力を借りる時にも、医薬だけでは足りないから神様に願うのです。医薬だけでは足りないから願うのだ、という自覚をにもつて神様に向かうことで、神様にすべてを足してもらう道が開けるのではないのでしょうか。



No. 615

令和元
7月号



思いが変われば (5)

小 関 照 雄

神様のおかげが頂けるような「心のひねり方」について、今月も話を進めます。心のひねり方というのは、神様への心の向け方ということです。例えば、神様を全面的に信じてお願いしているのか、それとも神様を一部だけ信じているような願い方をしているのか、そういう違いの問題です。神様を全面的に信じた願い方なら、神様は全面的に足して下さるが、一部しか信じていないような願い方では、神様は一部しか足して下さらない。そこには、そういった違いが出てくるのです。

「おかげ」という点で言えば、神様にすべてを足して頂く方がいいわけですが、神様にすべてを足してもらうには、「足りない」という自覚が大事な要件となります。では「足りない」という自覚」とは何なのか。分かりやすい医薬と信心の関係を例に、少し補足してみます。

病気になった時に医薬の力を借りることは、これまでも申しした通り、信心の上で問題になることはありません。世の中には医者にかかりたくてもかかれぬ人もあるわけです。かかれること自体がおかげを頂いているということなので、お礼を申して有り難くかからせてもらえばいいわけです。ただ、その時の心の持ち方として、「医者に行ったら医学的な治療によって安心は得られるけれど、まあ神様にもお願いしておこうか」的な願い方とか思い方に流れていないか、という問題なのです。

薬の処方方を一例としますと、確かに薬を服用すればたちまちに効くという事実があります。しかし同時に皆もよく知っている通り、薬には副作用という厄介な面がままあり、それを併せ持っています。下手をすれば別のところが悪くなります。この皆が知っている事実が何を意味するのか。即ち、薬には副作用が伴うという点で、完全ではない。不十分である。つまり、「足りない」ということなのです。

以上の点から私が思うのは、病気について神様をお願いする時、「そもそも

も医薬の力では足りないから(不十分だから)、神様に治してもらうことが要る」といった思いで願っているのか、それとも、「医薬の力が不十分だと言っても、七割、八割は治す力があるのだから、あとの二割、三割を神様がうまい具合に足してくれればいいんじゃないか」的な思いで願っているのか、そういう二つの違いがあるということですか。その違いは、神様にすべてを足してもらおうとするのか、それとも一部だけを足してもらおうとするのかの違いとなって現れます。

神様にすべてを足してもらおうというのは、序列の先頭を医薬から神様に入れ替えることであり、医薬の働きも天地の恵みの内のこととして、すべて信心の土俵に乗せてしまうことです。信心という土俵と医薬という土俵、土俵が二つあると、その二つの土俵の間を行ったり来たりして、序列の先頭がクルクル入れ替わる。土俵は信心という土俵一つにして、医薬もその土俵の上に乗せてしまう。医薬を信心の土俵に乗せるとは、「何にしても足りないのですから、医薬の働きや力も含めて、あなた(神様)がすべてを足して下さい」というような思いで願っていくことです。そこに、すべてを足して頂ける心のひねり方が出来ていくように思います。

*

さて、今月号では、そういった「心のひねり方」「思いの変え方」の実例を新しく紹介してみます。昨年十一月の『金光新聞』に掲載された、緩和ケア医である原信太郎先生(金光教師でもある)のお話です。

緩和ケアとは、がん患者さんの身体や心の辛さを和らげる治療を施すことですが、がんの脊椎転移のために首から下がまひして寝たきりになり、ケアを受けるAさんという患者さんがいました。寝返りも食事も排泄も、すべて誰かの手を借りなくてはいけません。Aさんは、元々の気性に病気の経過も加わって、いつもイライラし、ちよつとしたことで両親やケアスタッフに暴言を吐いていました。親でさえ、何を言われるかわからないとびくびくして、親子の距離ができ、ケアスタッフのみんなも、Aさんのことを重荷に感じていました。

原先生は、Aさんの心の助かりを神様に祈念しつつ、面談を重ねるうちに、少しずつ信頼関係が築かれてきた頃のことです。Aさんは治らないだろうということ半分分かっていながら、「どこかで最先端の治療を受けることが出来れば、まひが治るのではないか」と、原先生に尋ねてきました。先生はその問いかけには直接答えず、代わりに工藤房江さんという方の著作『遺伝子スイッチオンの奇跡』という本を紹介したそうです。

工藤さんは、子宮頸がん^{けい}で余命一か月と診断された後、ある本との出会いにより「自分は生かされて生きている存在だ」と気づかされ、そのことを心底実感したといえます。すると、自分を支え、生かす働きに対してお礼を言わねば気がすまない思いが次第に沸いてきて、自分を生かそうとする細胞一つ一つに、「有り難う」と繰り返し唱え続けました。そして気がつけば、がんを克服していたという実話が綴られていました。

Aさんはこの話を素直に受け入れて、「私もやってみようかな」と、ケアスタッフに対し、感謝の言葉を言い始めたそうです。「有り難うを言うのは本当に難しい。自分に都合が悪い時は、素直に有り難うが出てこない」と、実践した者だけが分かる経験も経ながら、Aさんは続けていきました。次第に「表情が明るくなった」「暴言がなくなった」と、スタッフの印象に変化が起き、更に両親との会話も増えて、以前は「絶対に家には戻りたくない」と言っていたのに、両親の世話を受けながらの一時帰宅も果たしました。そしてついには、徐々に指や腕が動くようになり、自分で食事が出来、車椅子にも座れるようになった。その変化に、本人も家族も、ケアスタッフの皆が驚くようなことになった——全文ではありませんが、このような内容でした。

——ともすれば、奇跡的な体の変化に目を奪われがちなところがありますが、しかしこのお話は、紛れもなく「思いが変わった」ことがその変化をもたらす要因となった実例に他ならないのです。Aさんには、そもそも医療しかありませんでした。医療が序列の先頭だったと言えます。だから緩和ケアを受けつつ、更に「どこかで最先端の治療を受けることが出来れば、このまひが治るのではないか」と、どこかで考えていたと思うのです。人間というのは、そういう思い方をするものなのです。

ところが原先生によって、そこに医療とはまったく別のものがもたらされました。「生かされていることへの感謝」ということです。これにより、Aさんの思いが間違いなく変わったと言えます。「思いが変わる」というのは、そこに新しいものが入って来る、ということですが。Aさんの場合は「感謝」という新しいものがもたらされて、序列の先頭が「医療」から「感謝」へ入れ替わったのです。

これを信心に置き換えれば、どうなるでしょう。信心とは、神様をもたらしてくれるものです、その神様を受け入れて、序列の先頭に神様を持って来る。序列の先頭を神様に入れ替える。それが即ち、信心における「心のひねり方」だということですが。



No. 616

令和元
8月号



思いが変われば (6)

小関照雄

先月号では、緩和^{かんわ}ケア医の原信太郎先生（金光教教師でもある）のお話を紹介してもらいました。改めて思い出して頂きますと、Aさんという患者さんの実例は、信心における「心のひねり方」や「思いの変え方」に通じるものであったと分かります。

まず一つは、がんの脊椎^{せきつい}転移により首から下がまひして緩和ケアを受けていたAさんが、感謝ということを教えられて思いが変わった。その後もAさんは、同じ緩和ケアを引き続いて受けていました。つまり、環境には変化はないのです。ところが、Aさんの思いが変わった後に、指や腕が動く、自分で食事が出来る、車椅子にも座れるという体の変化が起こって来たという事実がありました。ただ思いが変わっただけで、そこに変化が起こった。それほど「思いが変わること」には重要性があるのだと、この点から悟られるのです。

二つ目として、Aさんが頼みにしていたものは、医療でした。緩和ケアでは首から下は動かないままでしたが、どこかで最先端の治療を受ければ、まひが治るのではないかとAさんは思っていたようです。医療という土俵で、全てのことを考えていた訳です。ところが、思いが変わることで、Aさんが頼みにした医療という土俵は、感謝という土俵に入れ替わりました。ここのニュアンスが微妙なのですが、元々の医療という土俵に、感謝という新しい土俵を増やしたということではなく、土俵が入れ替わったのです。

信心する人でも、もっと最先端の治療を受ければ治るのではないかと、と思うことはあるでしょう。しかしそれでは、神様という土俵と医療という土俵、二つ作ることになってしまうのです。しかし、信心である限りは、やはり神様という土俵一つでないといけない。土俵が二つあっては、信心にならない。そこが、信心における心のひねり方なのです。信心する者がAさんの話から参考にすべきは、この点でしょう。

さて、右のように思いが変わることの重要性を確認してみたのですが、今月号では、せつかく変わった思いが元に戻ってしまいう実例、いわば逆方向の事例から、「思いが変わる」ことについて考えてみたいと思います。

玉水親教会・初代教会長（初代大先生）の信話に、格好かつこうの実例があります——主人の病気を機に、お参りを始めた婦人の話です。半期して大黒柱の主人が亡くなりました。子供を五人抱えて、いよいよ家が立ち行かなくなつたと、泣いてお願いに来ました。「先生、どうにもなりません。どうぞ食べられますように」ということです。五人の子供のうち、一番上の姉娘一人が学校へ勤めていて、収入と言えばそれだけです。それで三人の子を中学校へやっています。

初代は「学校はやめさせんでもええ。収入の道がないなら、そこをどないかして頂いたらええ」と説き、「先生、毛糸屋せよ言うてくれる人がありますよ」という話から、毛糸屋を始めることになりました。しかし、いわば素人商売みたいなものですから、そううまく行くはずありません。「先生、毛糸が売れません」「売れんなら、売れるようにお願いしておかげ蒙こうむつたらええ」と言っていたところへ、学校勤めの姉娘が、同僚の男と一緒（結婚）になって家を出てしまい、当てにしていた収入の道がぷつりと切れてしまいました。

初代の言葉は「その方がよからう」でした。「嫌でも応でも一生懸命になれるさかい。わずかな収入当てにしているだけ、お願いにスキが出来てくる。もつと一生懸命になるように、神さまが仕向けられたんや」と。何やかや言っておりましても、ボヤボヤしておられませんので、泣き泣きでも一生懸命になる。すると、次々にお得意を引き合わされて商売らしくなり、次第に売れるようになりました。近所から「毎晩お参りと出ていくが、どこぞの隠し男にでも援助してもらっているのじゃないか」と邪推じゃすいされるほどに差し支えのないおかげを蒙りました。

普通に考えると、とてもそんな具合に行けるはずのないところですが。それでどうにか三人の子を学校へやる事が出来、そのうちの二人が、何年かして同時に学校を卒業しました。以後は、子供二人分の学費が要らなくなつた訳です。加えて、学校を出た二人のうち一人は、就職してわずかでもお金を家に入れてくれるようになったので、前後で七十円ほど違って来る計算になりました。婦人は「先生、これでだいぶ楽になります」と初代に言いました。ところが案に相違して、初代の言葉は「そうは行かん。これからが余計に難かしいになるねん」というものでした。が、本人にそれ

は聞こえなかったようです。それはそうです。本人としては「そんなことはない。これからは楽になるに決まっている」と思っただけで、果たして、しばらくして参って来ると「先生、この頃さっぱり売れません」という結果になりました。

どうして初代には、こうなることが分かったのか。「そやから子供が学校出た時に、これから難かしゅうなると言うといたはずや」と。しかし、婦人には「それが私に分かりません。暮らしが楽になって来たと思うたら、なんでいけませんねん」となります。以下は初代の分析です。暮らしが楽になったと思うだけ、一心に油断がつけ入るから、それだけお願いが甘くなる。今まで出していた二人の子の学費が不要になり、反対にお金が入って来るようになった。これで少し楽になったと思うと、それが心に染み込んで、一心が緩んで来る。これが初代の言うガクンと来た理由です。

主人が亡くなった直後は、もう頼るものは神様だけ、神様一本という一心になっていたから、そのおかげで売れていた。ところが心にスキが出来て、その一心が緩んだ。「おかげ頂けたら、売れるが、おかげ頂けなんだから、売れない」。信心とは、そういう理屈だということです。婦人の「そうかて先生、毎日二回ずつ参ってまっせ」という言葉に対し、初代は「あかんねんと二へんが三べんでも。百ぺん参ってもあかん。肝心の信心を回復させんとどうもならん」と。「それが先生、前の時のように一心になれませんねん」。やはりこの婦人の言葉通り、信心のほころびに問題があった訳です。

——さて、改めてこの毛糸屋さんの実例を振り返りますと、主人が亡くなった直後は、頼るものは神様だけという状況でしたので、神様だけを信じて、神様に全てを足してもらおうよう、自然思いが固まった結果、おかげになったのです。ところが、お金の出と入りの状況に変化が生じて「これからは楽になる」と思った時、神様よりもお金を信じ、お金を頼る心に変わってしまったのです。つまり、逆方向に思いが変わった。それまで序列の先頭にしっかりとあった神様に代わって、お金が序列の先頭へと入れ替わったのです。

抑々「楽になる」という思いの出所は、お金の出と入りの計算にあります。この計算は、いわば自分のはからい（算段）であって、神様より自分を信じていることにもなります。清水に墨を一滴落とすと、そのきれいな水は全部黒くなってしまいます。神様よりも、お金や自分を信じる心を土台に、いくら日に二度お参りしてお願いしても、それはもう、清水に墨を一滴落として黒くなったような心で願っていることになるのです。



No. 617

令和元
9月号



思いが変われば (7)

小関照雄

先月号では、主人を亡くして五人の子供を抱えた婦人が、毛糸屋を始めでどうなったかという実例を、玉水親教会・初代教会長（初代大先生）の信話から紹介させてもらいました。少し復習をしながら話を進めますと、当初はどうにも追い詰められた生活状況であったが故に、頼るものは神様だけという信心で、周りが不思議に思うようなおかげを頂いたのですが、あることを境に、「この頃さっぱり売れません」という逆転状況に陥りおちいました。その原因はなんであったか。

日に二へんお参りして、一生懸命商売に精を出す。売れなくなる前と後で、毛糸屋さんのしていることには変わりはありません。また、この方の商売の仕方が悪かったわけでもありません。繁盛していたのは、神様のおかげで売っていた、ということなのです。つまり「おかげ頂けたら、売れるが、おかげ頂けなんだら、売れない」ということであって、売れないのは、おかげの頂けない信心になっていることにその原因があると、そういう意味がここにはあるのです。

本人も「それが先生、前の時のように一心になれませんか」と自覚していたように、あることを境に、神様に一心にすが縋らせない何か、この方の心の中に生まれてきたのです。それはお金の計算でした。子供二人が学校を出て、二人分の学費が要らなくなり、内一人が就職して、お金を家計に入れてくれるようになった。「前後で七十円ほど違ってくる。これで楽になる」という思いが、それでした。

当初は、神様しか頼るものはない、という思いだけでした。ところが、お金の計算が「楽になる」という思いを生んだ。この「楽になる」という思いには、神様のおかげよりも、お金の計算の結果を信じるという心が、既に現れているのです。神様を信心するのではなく、お金の計算を信心するという心が変わっていきこうとしている。そういう姿が、ここにはあるの

です。結果として、神様よりも、お金を頼りにする心の方が勝まさってしまい、だんだん強くなつていく。そうして、それまでにあつた神様を頼る心が浸食しんじよくされていったのです。

この毛糸屋さんの心は、当初は神様一本の、本当に澄すみ切つた清水せいすいのよ
うな心でした。そういう心で神様に向かい、「普通ならとても考えられない」
と周りが不思議がるほどのおかげを授けていただいた。ところが、そのき
れいな清水のような心に、墨をポトンと一滴落としてしまった。墨とは「こ
れで楽になる」という思いです。どんなにきれいな水でも、墨を一滴落と
せば、水は全部真っ黒けになってしまいます。心も同じです。この毛糸屋
さんは、お金の計算から生じた、ちよつとした心の変化によつて、神様に
向かう清水のようなきれいな心を無くしてしまつたのです。

「思いを変える」ということには、おかげの頂ける向きに思いを変えて
いくという面と、逆に、おかげの頂けない向きに思いが変わつてしまう
という面との、両面があると分かります。先月号の毛糸屋さんの实例は、以
上のように「思いの換え方」「心のひねり方」に関わるエッセンスが詰ま
つたお話でありました。何気ない、なかなか微妙な心の問題でありますので、
「何やら難しいなあ」と思われる方もあるでしょう。ただ、これを簡単に
ひと言で言えば、「自分は、どこまで神様を信じているか。どれだけ信じら
れているか」という、信心の基本となるような信念の問題だと、言えるの
です。

例えば、以前にこういうことがありました。だいぶ高齢になられた、あ
る教会の先生が「最近耳の聴こえが悪くて……。どうも具合が悪い。医者に行
つてゐるんだけど、ちつとも治らなくて：」と、私との会話の中でちよと
不満げな感じで言われました。何気なにげない言い様いひようで、別にどうということも
ない。そのまま聞き流してしまうような内容です。しかしこれを、敢あえて
突き詰めて考えみるとどうでしょう。

そもそも、神様以前の問題として、医者に行けば治るはずだと思つてい
るから、このような言い様になるのではないか。むしろ、医者に行つても
治らないからこそ、神様に願うのではないのか。ここには、どうも神様が
しつかり感じられない。信心する者から出て来なくてはならない、神様の
影が薄い。「医者に行けば何とかかなりそうなものに：」と思つているか
ら、不満げな言い様になるのではないか。信心する者として、肝心の「神
様」はどこへ行つたのか。

——このように突き詰めて考えていくと、神様に願う前にまず医者があるって、その医者の方を信じて、神様を真つ先に信じていないような心の状態が、ここには漂ただよっていると感じさせられるのです。何気ない言葉に、その人の神様を信じる心の状態が現れるのです。そういう心を土台に神様にお願ひしても、それはもう、清水に墨を一滴落としたような願ひになっってしまうのです。これは他人事ひとことではなく、信心する者誰もが、そうなりやすい可能性を持ち合わせている、ということなのです。

こういうことが思い起こされます。チョコレートが体にいいという知識が、次第に共有されて来ました。これはチョココの原料であるカカオの成分(ポリフェノール)によるものであり、従ってカカオの含有量がんゆうりょうの多いチョコほど、その効果も大きいということになるのですが、目安であるカカオの含有量70%以上のチョコは甘くなく、今までのチョコの味に慣れた人には、おおよそ美味しくない。けれども体にいいということ、味の方は多少犠牲にしても、カカオ含有量の多いチョコを習慣的に食する人が、増える傾向にあるのかも知れません。

さて、ここからは信心の話に戻ります。チョコを積極的に食べようとしている人は、カカオ含有量の多いチョコを食べれば体にいい効果が現れるはずだ、と思って食べるのでしようが、信心する者の目から見れば、そこに神様の働きの感じがなく、それを食せば体の状態がよくなるというものでもない、という感覚があります。つまり、体にいいと言われるものを食べてその効果が現れるのは、神様の恵みがあればこそ、神様の働きが加わればこそその結果だ、という考え方です。

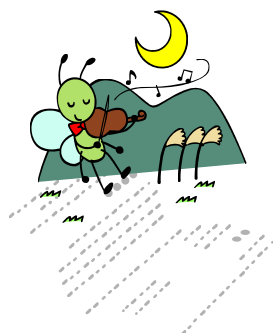
よく分かるように説明するのは難しいのですが、例えば商売する人は皆、儲けようと思つて商売をしています。しかし、実際に儲かるか損するかは、分かりません。これはつまり、闇雲やみくもに鉄砲を撃っているのと同じで、当たるか当たらないかは分からない。もし、そういう不確定な中で儲かったとすれば、それは恵まれればこそその結果で、恵まれているから儲かったのだ、という理屈になるわけです。

昔は「冥加みょうが」(神の加護かご)とか「天祐てんゆう」(天の助け)ということをよく言つたようですが、これがまさに「恵まれる」ということなのです。チョコでも運動でも、恵まれてこそ、効果に繋つながる。とすれば、この世の全ての物事は、神様抜きに考えられないということなのですから、いつも神様を見失わないように、という向きへ思いを定めていく。これもまた「思いを変える」「思いが変わる」ということです。



No. 618

令和元.
10月号



思いが変われば (8)

小関照雄

先月号の最後に、「冥加^{みょうが}」（神の加護^{かご}）とか「天祐^{てんゆう}」（天の助け）という言葉があることを申しました。昔はこういうことをよく言ったようですが、この道の信心で更に翻訳^{ほんやく}すれば、「恵まれてこそ」という意味になります。テレビの健康番組で、例えばある特定の食べ物には血圧を下げる効果があるということを実証するために、血圧が高めの人たちにその食品を一定期間^{せしゅ}摂取^{せしゅ}してもらい、前後で効果を確認するという類^{たぐい}の実験が、よく行われます。結果は大概^{たいがい}の場合、効果の大きい人、効果はあるがそれほどでもない人、そして、効果がないか、むしろ逆の結果が出る人、といったパターンになります。どうしてこういうバラツキが出るのでしょうか。同じ食品を摂取しても、百人が百人とも効果があるわけではない。その違いを生み出すものは何なのか、という問題です。

そこで昔の人は、冥加とか天祐ということを言った。つまり、効果があった人とは、そういう神様の加護や天の助けというものに恵まれたから、効果があった。それはそうでしょう。効果があつたと言っても、それは自分の力で生み出したものではないからです。逆に効果のなかった人とは、神様の加護や天の助けというものに恵まれず、そういう恵みが薄かったので、効果がなかった。冥加とか天祐には、そういう意味合いがあるのです。歯が健康であれば、いつまでも美味しい物、好きな物を頂ける。だから人一倍そのことに腐心^{ふしん}し思い切った手段も講じる。しかし歯の健康状態は完璧でも、内臓を悪くすれば美味しい物も好きな物も、食べられないのです。つまり、恵まれてこそ美味しい物も頂けるということです。食べることも見えることも眠ることでも、みな同じです。不眠で悩む人がいるのはどうしてか。当たり前のように眠れるのは、恵まれてこそ眠れているのです。不眠で悩む人のことを考えれば、それは分かります。

さて、この「恵まれてこそ」という道理が分かれば、人はそこで何を考

えるでしょう。「天から恵まれるような生き方をしよう」ということにならないでしょうか。まず冥加と言うことを知る。そしたら次には、その冥加を得るにはどうしたらいいのかと、考える。冥加というのは、信心で言えば「徳を頂く」ことです。徳のある人間になることに、骨を折る。徳のある人間とは、いわば「天地が味方になってくれる人間」です。そのことが、「恵まれる」ことに繋がっていくわけです。天地が味方になってくれなければ、また天地を敵にするようなことでは、恵まれるわけではない。——このように思いを変えないと、神様を序列の先頭にもつてくる信心には繋がらないのです。冥加や天祐という言い方をするのは、天や神様を序列の先頭にもつてこようとする働きの現れだと、私は思います。

以前に、玉水親教会・初代大先生（初代教会長）が、「そもそも医者が病気を治すのではない」という話を残していることを取り上げました。ということは、どうも初代は「医薬の力で病気は治らない」と思っていたらしい、ということになるのです。実際「医者が病気を治すのではない」と言われているわけですから、そうなります。では、医薬の力で病気は治らないと初代が思っていたとすれば、初代は神様に病気平癒へいゆのお願いをする時、どのようなお願いの仕方をしていたのか、という一つの疑問が出てきます。

例えば「医者に行きますので、どうぞ治療の効果がありますように。薬もよく効ききますように」という願い方。仮に医薬の力で病気は治らないと思っている人が神様に願うとしたら、このような願い方をするだろうかと考えてみると、どうもそうは思えないのです。医薬の力で病気は治らないと思っているのだから、やはりこんな願い方はしないのではないか。そこで、医薬の力で病気は治らないと思っている人が願うとしたら、どんな願い方になるか、想像してみました。「医薬の力も借りますが、しかしそれでは十分に力が足りませんので、神様に全てを足して頂いて治していただきますように：」。こんな感じになるのではないのでしょうか。

治療や薬の効果を願う願い方が、間違いだというのではありません。これはあくまで、神様を序列の先頭にもつてこれているかどうかの、信心の問題なのです。医薬の力で治ると思っているか、それでは治らない（足りない）と思つて願っているか、その差は何かと言えば、結局どこまで神様を信用し得ているかの、その差なのです。医薬だけでは病気は治らないという思いとは、要するに神様を序列の先頭に押し上げる働きなのです。「そもそも医者が病気を治すのではない」という初代の言葉には、神様を序列の先頭に押し上げる意味が、隠されていると感ずるので。

もう一つ聞いてもらいますと、背負いの呉服屋（呉服物を背負って歩く）をしている信者さんと、初代との問答を再現した話があります。「この神様を信心さして頂いていたら売れ残りはできませんと思うが、あんたここはどうやねん」と初代。「それがたくさんできて困ってます。ちゃんと神様をお願い申して仕入れしとります。それやのに売れ残りができます」と信者さん。こういう問答ですが、そこで初代は「それはおかしい。仕入れする時に、神さまにお願い申して仕入れさして頂いたものなら、そんなこととはないはずや。あんたは、神様をお願い申して、と言うが、それは本当の願いになってへんのと違いますか」と、その原因を指摘しました。ここで大事なのは、初代が「本当の願いになっていないのでは…」と指摘した、その「本当の願い」とはどういう意味か、ということなのです。

初代は、この信者さんの商売の仕方を縷々推理してみせました。本人からすると、それが気持ちの悪いほど当たっていたと言います。簡潔にその要点を抜き出すと、こうです。神様をお願い申して仕入れたものなら、それはきつと、お得意の誰かが必要とする品物に決まっています。が、その品物を持って回って、お得意から「あんたに似合わん、ようもこんなもの仕入れて」とでも言われたりすると、「これはえらいことした。仕入れ損のうて、変なものを掴んだんと違うか。損せにやええが」と思うようなことはないか。そうなると、もう持って回る気乗りがしなくなり、家に置いておく。しかし、せつかく仕入れた品物だからと、しばらくしてまた持っては出るが、荷物の底に入れておくので、お得意に見せるのは別の物ばかり。結局目に触れず、買い手がつかん。「やっぱり売れんわ」となり、また家に置いておくようになり、それが最後に売れ残りになるのと違うか。

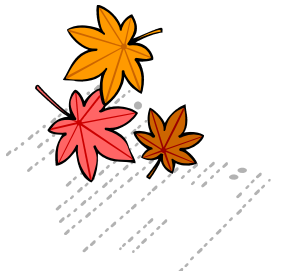
——これが初代の推理です。お願い申して仕入れた物なら、必ず売れる。これは神様を序列の先頭にもつてくることから出てくる思いです。それがお得意にちよつとケチをつけられると、その思いの中に「もしや」という思いが混じってくる。神様を先頭にした思いの中に「我」（自分の思い）が混じってくるのです。そうなると、神様は序列の先頭から転げ落ちる。神様の序列が、先頭から下になるから、「しまった、仕入れ損なった」という「我」が全面に出てくることになるのです。

お分かりのように、この実例もまた「思いを変える」ことに繋がるお話なのです。信心とは、神様を序列の先頭にもつてくることです。そのように思いを変えること、また、神様を序列の先頭から落とさないことが、神様に全てを足して頂ける信心の元になると、思わされるのです。



No. 619

令和元
11月号



思いが変われば (9)

小関照雄

玉水親教会・初代大先生（湯川安太郎「初代教会長」）は、その前半生を長らく商売に携たずさわっていました。和歌山の親戚の家では、家業の生魚問屋を十四歳から陣頭に立って切り盛りし、二十歳で大阪に出てからは、当初は奉公勤め、その後は小売り商に転じて、三十五歳まで商人として人生を歩みました。

で、その商売は成功を収めたのかというと、ほぼそうとは言えない結果に終わりました。そもそも和歌山から大阪に出たのは、傾いた生魚問屋の余力が残っているうちに、資金的な立て直しを図るためでした。しかし大阪での奉公先は、店の主人元来の商売不熱心もあって、最後は一人になりながら八面六臂はちめんろくつびの働きを尽くすも、倒産の憂き目に遭います。そして、小売業の方も、紆余曲折はあれど焦げ付きが大きくなり、ついに息の根が止まる寸前の土壇場まで追い詰められました。

こうした経緯を辿ってみますと、どうも初代には商売の才覚があったとは言えないような結果が残っています。しかし、実際はそうではなかったのです。それが一番よく分かるのは、奉公先の店の整理を一人で進める中で、起こった引き合いです。「うち（の店）へ来てくれるなら」という条件で、相手が債権整理の条件を呑んでくれるとか、また店の整理がついたら「是非うちへ来てくれ」という話もあり、それも一軒や二軒ではなくアチコチから声がかかり、中には「店の後継者として迎えるから」といった好条件の話も持ちかけられたくらいでした。

つまり、同業者が「うちへ来てくれ」と取り合いをするくらいのもので、その業界の人たちが「これは」と、みなが認めるくらいの商売の才覚、商売の腕を初代は持っていたということなのです。ところが――なのです。その後始めた小売り商売の実績の方はどうであったのかというと、先述の通り、やはりうまくいかない状況へと追い詰められたのです。このことは、

一体何を意味しているのでしょうか。

それはつまり——同業者がみな認めるくらいの商売の腕を持っていても、その腕や才覚を持っていてだけでは足りない、ということなのです。いくら凄^{すじ}い商売の腕や才覚を持っていても、恵まれなければ、その腕や才覚が生きて働かない、その腕も才覚も生かすことができない、ということなのです。先月号で「恵まれる」ということを申し上げました。そこで繰り返し説明した「恵まれてこそ…云々」という事例は、こういったところにも当てはまるのだと思います。

さて——それでは初代は、傑出^{けっしゅつ}した商売の腕を持ちながら、恵まれずに商売の苦境に追い込まれた現状をどのように打開したのか。実はその打開の方途こそが、「思いを変える」ということであり、初代自身が後年に説いた「心のひねり方」だったのです。初代は、まさに天地から恵まれる向きに思いを変え、自分の心をひねったのです。

この辺り^{あた}のことは以前にも申し上げましたが、今までは、信心していると言いながら、実際は、神様を序列の先頭に据えた商売になっていなかった。つまり商売は、「自分がする」という商売であって、自分の力で自分の腕を振るう、という商売になっていた。商売を営む主人は、誰だったか。神様が主人ではなく、自分が主人になっていた。その思いが、実は間違っていた。だから初代は、神様を主人とする向きへ心をひねり、思いを変えたのです。

商売は、そもそも神様の商売なのであり、自分は、神様という主人に使って頂く奉公人。そういう形の商売に転換するのが、本当の信心の道だと気づいたので。この「奉公人の信心」へと思いを換えることで、何がどう変わるのでしょうか。商売の上で神様が主人となることには、どんな意味があるのかと言えば、それは商売の上で、自分の力（力量）を放棄することを意味しているのです。平たく言えば、神様がご主人なのだから、そのご主人を乗り越えて自分が出しゃばったらいけない。むしろ、出しゃばる必要はない。もし自分が出しゃばったら、もう神様はご主人ではなくなる、ということになるのです。

で、神様をご主人として自分の力を放棄すると、どうなるのでしょうか。商売の上で自分の力を放せば、自分が発揮する力はゼロになるのですから、自然神様が、商売の全てにおいて力を足して下さることになるわけです。そしてこれにより、天地から恵まれる土台が調^{ととの}うのです。「恵まれる」と

は、天地が味方をしてくれることです。神様が全てを足して下さることです。恵まれることで、初代が備えていた商売の腕や才覚が、神様の力によって生きた働きを現していけるようになるのです。「恵まれる」とは「足して頂けること」だと、私は思います。

——以上申し上げた点々については、少し補足をしておかねばなりません。それは、右のような話を聞いて頂くと、一つの疑問が出てくると思うからです。即ち、「神様はご主人 自分は奉公人」という向きへ信心を切り替えて、商売は神様の商売であるのだから、商売の上で自分の力は一切放棄し、ご主人である神様に使って頂く——ということだが、それは実際の商売を取り進める上で、どのようにしていくことなのか、具体的な商売の進め方がよく分からない、という疑問です。

これについても初代は、きちんと整理して細かく教えて下さっています。詳細はまたの機会に譲りますが、例えば一つ、商売に出る時には、神様の買物帳を持って行くということ。「神様、これから買物にやらして頂きます。私は頼りない者でございますから、どうぞご一緒にお願いいたします。私はお供をさせて頂きます。私の買う品物は、あなたのお指し図さしずで買わして頂くことになるのですから、どうぞ買場のおかげ頂きますようにと、こう願うて買物に行けば」、それが神様の買物帳になる、といった具合です。

但し、ここでも注意が必要ながあります。それは、形だけ真似まねてもダメだという点です。こんな初代の話があります。

——先だっても子供が悪いと言うて泣いてる奥さんがあった。「泣いたらいかん」「泣いてると死にますか」「あんたに『どうでもこうでも死なさん』という胴腰がすわってたらおかげ頂けるが、『どや知らん、死ぬるやも知れん』というようじゃったら、おかげ頂けない。』『どうでも、おかげ頂いて見せるッ』という心で助かる」「本当に助かりますか」「ウソの頼みでなかったら助かる。『死なさんッ』いう、その心におかげがあるんだ」と言うたことがあります。——

「一心の祈り」とは、序列の先頭にしっかりと神様を持ってきて、その神様に全てを足して頂くことです。その思いを動かさず、神様を丸々信じる方へ心をひねり切ってこそ、信心が本当の信心となり、おかげになるのです。その心がなく、上辺うわべだけ買物帳の願いを唱となえても、それは本物の「神様の買物帳」とはならないのです。肝心なことは、その思い、その心をしっかりとさせることにあるです。



No. 620

令和元
12月号



思いが変われば (10)

小関照雄

「弘法筆を選ばず」と言います。しかし一方で、「弘法も筆の誤り」とも言います。弘法大師は筆を選ばないほどの名人なのに、どうして筆を誤るのか？ここでこんな疑問を持った人がいました。一見、まともな疑問に聞こえるかも知れませんが、実際はトリックみたいなので、この疑問自体が間違っています。そもそも「筆を選ばない」ことは、「決して書き間違わない」という意味ではないからです。つまり、三筆と謳うたわれ、筆を選ばないような書の名人でも、書き誤ることがある、ということなのです。信心の場合はどうでしょう。信心の名人ばかりが、信心するわけではありません。むしろ多くは、自分自身がそうであるように、凡人が信心を行じるわけですから、そううまくいかないのが、むしろ当たり前だと申したいでしょう。

今年も立教一六〇年のお年柄でした。教祖様が神様の頼みを受けて農業を止やめ、人を助けて道を伝える御用に専念された年から数えて一六〇年、という意味です。ごく簡単に申しますと、教祖様は「自分で信心して、自分でおかげを受ける」という信心を説かれました。当時、信心と言え一般に、祈きと禱うしや者と呼ばれる人たちに頼んで拜んでもらい、おかげを待つという形でした。いわば他人任せの信心だったわけですが、教祖様は、そういう他人に依存した信心を一般庶民の所まで降ろして下さいだったので。特別な宗教者や祈きと禱うしや者だけでなく、一般庶民の誰もが皆、自分の信心によっておかげを受けることが出来る、それが教祖様が教えられた新しい信心であったわけですね。

さて、これまで「心をひねる」「思いを変える」というキーワードで話を続けてきていますが、ひと口に「心をひねる」と言っても、おかげの頂ける方へ心をひねってこそ意味があるわけですね。今の「自分で信心して、自分でおかげを受ける」という教祖様の信心が、ここにも深く関わっています。要するに、「自分で信心して」とは、おかげの受けられる信心を自分で

する、ということなんですから、そのおかげが頂けるような心のひねり方をしてこそ意味がある、ということになるのです。

冒頭に「凡人が信心を行じるわけですから、そううまくいかない」と申しましたが、私たちとしては、玉水親教会・初代大先生（湯川安太郎、初代教会長）のお話をよく吟味して参考にすることが、一つの手立てとなります。初代在世中に、初代の話を「正味の百円札を懐へねじ込んでくれるような話」と言った人がありました。

東京から当時の玉水教会へお参りした人で、「自分が聞きたいのは、倫理のような話ではない。そんな講義は聞きあきた。何の役にも立ちません。ところが昨日話を聞いて、自分の探し求めている道が見つかりそうに思われた」ということで、その後「暫く帰らん」と留守宅へ電報を打ち、ひと月ほど広前に座り込んで話を聞いて帰った、という逸話です。ひと言話を聞いて分かるほど甘くはないということ、分かりかけたものをモノにするには、やはり時間もかけてじっくりと腰を据え、という姿勢が必要なのでしよう。

この東京の人が言った「正味の百円札を懐へねじ込んでくれる話」というのは、まさに「おかげの頂ける方へ心をひねる」ことに通じるものです。そこを、私なりに更に詳しく申してみても、皆さんの参考にして頂きたいと思います。初代は実に、大変なことを言い切ってしまったています。初代の話を漫然と読んでみると、読み過ぎしてしまうようなことですが、それは「私たちの色々な生活問題が」神様のおかげによって、どうにでもしていただける。事実、どうにでもなるんですから」という言葉です。

「『何でも神さまにお願いして、どないでもなる』なんてことを言おうものなら、『そらインチキじゃ』と言われまっしやろが」と初代自身が言う通りなのですが、「事実はどうにでもなるのですから」と、こうくるのです。この言葉は、人間の力を越えたものに触れた時のような、思わず背筋がゾクゾクとするような言葉だと、私は思います。どうしてインチキでなく事実だと断言できるのか。それは次のような初代の但し書き「しかし、本当に神様が分かり神様のおかげを掴まえておらんことには、そんなこと言うたらインチキになります」という言葉でその理由が分かります。即ち初代自身が、「本当に神様が分かり、神様のおかげを掴まえている」から、事実だと断言できるのです。

先の「正味の百円札を懐へねじ込んでもらう」というのは、実際どういうことを指しているのか。言葉を換えれば、この初代の「事実、神様にど

うにでもしていただける」という信心の中身と重なるのではないのでしょうか。神様にどうにでもしていただける、そういうおかげが受けられるわけで、それはまさに「正味の百円札を懐へねじ込んでもらう」ような感覚ではないでしょうか。

さて問題は、どうすればそのようなおかげが頂ける方へ、心をひねることが出来るか、ということなのです。それは、特別でない凡人にも十分出来る信心だと、私は思っています。以下、事例を挙げながら考えてみます。

まず一つは、ある人が入浴中に、体の具合が悪くなった。「ちよつとおかしい」と感じて、急いで浴室から上がって服を着る間に不調が進み、這々の体で横になり、暫くじつとしていました。幸いにそれ以上悪くはならずに治まり、体を起こすことが出来ました。この一つの経験があつてから、この人には、即一つの変化が起こりました。次の入浴からは、入る前に神様にお願いしてからでないと、恐くて入れなくなったことでした。

お風呂に入る前に神様にお願いする。そんなことは、それまでしていなかったことです。頭にもないし、考えてもいない。それをしなければならなかったか、する必要はあるとか、そうさせてもらいたいとか、全く感じていなかったことでした。そこに変化が起こったのは、「当たり前が当たり前でない」ことが分かったからです。つまり、それまで何の問題もなく風呂に入れていたことが、実は当たり前でなかったことを知らされたからです。

それは一つに、「生かされている」ということです。生かされている自分であるから、恵まれてこそ、無事何事もなく風呂に入れる。神様の守りがあつてこそ、なのです。そして、自分の力だけでは無事に風呂にも入れない。つまり、自分の力が足りないということ。自分の力が十分ならば、入浴中に困ることはないはずである。それが分かったということなのです。

言ってみれば、こんな体調悪化を経験せずとも、分かった方がいかに決まっているのですが、そこが凡人故のまどろっこしさでしょうか。この人はお願いしてから入浴するようになって、以後は同様の問題は起こらずに過ごせていましたが、ある日風呂から無事上がった時の「お礼」が抜けていることに気がつき、お願いとお礼が入浴前後で出来るようになりました。

実は、この「お願いとお礼」が、神様を序列の先頭に持つて来る、信心の上で大切な「心のひねり方」となっていたのです。そしてこれは入浴時の問題だけではない。一事が万事なのです。万事に同じことが言えると分かることが、「心のひねり方」を更にしっかりしたものにしていくのです。